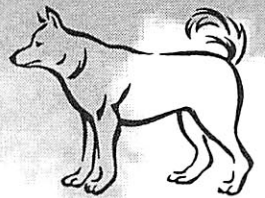


## 忠犬と機械工学

工学院大学 理事長  
大橋 秀雄



いつも挨拶がかった記事ばかり書いているので、今回はがらりと趣向を変えて、私自身のことを語ってみましょう。それも、なぜ機械工学を志したかについて。

私は東京生まれの東京育ち、胃弱に悩むひ弱な子供でした。それでも父が陸軍軍人であったせいか、小さい頃から「お父様のあとを継いで立派な軍人になりなさい」と母に洗脳されていました。敗戦の年1945年の4月、都立戸山高校の前身、都立第四中学校1年生を終えたのち、西八王子にあった東京陸軍幼年学校に入学しました。その前年、父は北京で戦病死していましたが、父母の期待に応えることができました。

中学1あるいは2年を終えて入学する幼年学校は、全国に六ヶ所ありました。これは、陸軍士官学校に入って軍人としての道を歩み始める前に、3年間みっちり鍛えて筋金入りに仕立てる予備教育でした。その跡地は今は大きな団地に変わっていますが、全寮制の学校で、午前中はロシア語を始めとしてみっちり勉強、午後は体育や訓練に励んでいました。

入学と同時に米軍の沖縄上陸が始まり、戦況は日々悪化していました。本土決戦も近いという8月の始め、家に帰って別れを告げてこいということで、二三日の休暇が出ました。私は上越線に乗って、父の郷里、新潟県の山の中に疎開していた母や姉弟を訪ね、短い時を過ごしたあと、再び東京に戻りました。上野駅に着いて西八王子に戻る途中、新宿駅で空襲警報が発令され、電車が全面ストップしました。夜が暮れると、西の空が赤く染まっているのが目に入りました。やむなく新宿駅西口に出ると、薄暗い駅前に草っ原が広がり、巨大な土管がゴロゴロしていました。私はその中の一つに潜り込み、やぶ蚊と闘いながら眠れぬ一夜を過ごしました。翌朝、警報が解けて電車も動き始めたので、ようやく西八王子駅にたどりつき、学校を目指して歩き始めました。しかし待っていたのは、焼夷弾の集中攻撃を受けて灰燼と帰した焼け跡と、焼死した学友の悲しい知らせだけでした。前の晩に見た赤い空の下で、悲劇が起きていました。

新宿中央通りに立って、競うようにそびえる高層ビルを見上げるたびに、私の脳裏に土管が転がっていた昔の記憶が蘇ってきます。もし私の休暇が一日早かったら、新宿がこんなに変貌する姿を見届けることができなかったかも知れません。不思議な感慨です。



ドイツでは、博士試験合格直後、頭に手製の博士帽をかぶせ、リアカーに乗せて町中を練り歩く習慣があります。東洋風菅笠を被せられて、日独国旗を掲げてパレードに出発する直前のスナップ写真です。

敗戦の日、8月15日、終戦の玉音放送を聞いたあと、幼年学校の先生達（バリバリの青年将校）は、中学生の年頃の生徒達を集めて言いました。「戦いは敗れた。これからそれぞれ両親の元に帰って、文化国家建設のために努力せよ」もちろん、先生達は敗戦の決定を事前に知っていたようです。しかし、陸軍全体のなかに敗戦を認めない不穏な動きがある中で、なぜ文化国家という言葉を選び出すことができたのか、いまでも不思議でたまりません。戦争をリードした軍人たちの中に、冷静に先を見る人がいたことも確かです。

満員で鈴なりの上越線のデッキにしがみついて、母が待っている新潟県の疎開先に辿り着きました。山の麓にある父の家から、近くの町の県立中学まで1里（4キロ）の道のりがあります。水田が広がる中の一本道、強い日差しで蒸れるような夏の日々も、吹雪に荒れる冬の日々も、ひたすら歩き続けるうちに、まず私の体が変わってきました。胃弱などどっかへ飛んでしまったのです。私は「敗戦のショックが自分を変えた」と恰好付けていますが、実は転地、生活環境の変化が真の原因だったようです。

さて疎開して山村に住むと、山から薪を運んだり、稲刈りの手伝いをしたりと、結構働かせられます。それまで味わったことのない肉体労働の辛さを初めて知りまし

た。

疎開先の友だちに運送業の家の子供がいました。運送業といっても、注文に応じて大八車を引いてお客さんの所にゆき、預かった荷物を指定先に届けるという個人営業です。車はお父さんが引っぱるのですが、いつも犬が一匹それを手伝っていて、近所では忠犬として有名でした。あるとき、汗を流しながら坂道で大八車を引いているお父さんと忠犬に出くわしました。友だちのお父さんですから、「手伝いましょう」といって私は押し役に回りました。例の忠犬も、赤い舌を出してハッハッと息をしながら大八車を引っぱっているわけです。その忠犬が私のほうを見て、「忠犬と言われるのもつらいよ。わかった？」と言いたげな眼をしました。多少物語風ですが、私にはそう見えました。それでふと思いました。「このまま、ただ手伝うのでは犬と同じで、それでおしまいだ。こういう労働から人間を解放することを考えなければならない。それには、エンジン一つあれば十分だ。エンジン付きの車をだれでも使えるようにするために、機械工学をやるべきだ。」

少し脚色しましたが、事実無根ではありません。こんなようなことがきっかけとなって、大学で機械工学を専攻しました。卒業後は、その当時夢の原動機と言われていたガスタービンをやりたいと決心して、数少ないガスタービンメーカーだった石川島重工に入りました。大八車に付けるエンジンが出発点でしたが、飛行機用のエンジンであるガスタービンに眼が向いてしまったのは、浮気ということでしょうか。

さて、会社に入って1年も経つと、技術の限界が見えてくるようになってきました。当時の日本企業はどれも貧乏で、自前の技術開発を行う資力も意欲も少なく、も

っぱら外国から入ってくる技術に依存していました。外国の文献や資料を首を長くして待っているくらいだったら、自分でそれを創り出す側に立ちたいと思うようになってきました。丁度そのころ、ドイツへの留学生制度があることを知りました。世界初のジェットエンジンはドイツ製ですし、送風機や圧縮機の開発では先頭を切っていたドイツ（西独）で研究したいと思い、留学生試験を受けたところ、受かってしまったのです。会社在籍のまま2年間西ドイツのブラウンシュバイク工科大学流体力学研究所で研究し、境界層理論で世界的に有名なシュリヒティング教授から博士をもらいました。

帰国して石川島で再び働き始めると、母校の東大機械工科学科から教員として戻らないかという話が起こってきました。悩みました。会社には大きな恩義がありますし、とはいっても大学もまた魅力的ですし。いろいろ悩んだ末、大学に戻ろうと決めました。その当時の社長は土光敏夫さんでした。東大の長老教授が土光さんと会って移籍の直談判をしたとき、「工場の現場で技術者として働くことも大切だけれど、大学で将来の技術者を育てるのも大切なことです。その選択は、本人に任せます」と土光さんは言って下さったそうです。たった5年間の会社生活でしたけれど、私が学者であるという意識よりも技術者であるという意識を先行させているのは、まさにその体験から発しています。

私がかこ十数年にわたって努力していることは、工学院大学に関わることを除けば、技術者全体の地位を向上させる基盤を築くことです。その発端も、あの忠犬の赤い舌だったかも知れません。

以上

